様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４３２５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０２０５３

研究課題名（和文）母子家庭の介護実態調査から探る介護支援の構築

研究課題名（英文）Constructing a support system from care survey on single-mother ramily

研究代表者
流石　智子（sasuga, tomoko）

京都華頂大学・現代家政学部現代家政学科・教授

研究者番号：４０１３２２８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：2018年度は、全母子協を通して母子家庭を対象にアンケート調査（627名）を実施した。介護を行っている人は44.35%、複数ケア（ダブル）は11.79%、複数ケア（トリプル）は、1.02%であった。50歳代が54.5%と最も多かった。介護が必要になることで、転職や引っ越しで生活に変化が起こり、そのため定職に着けず経済的問題を抱える状況に陥る。2019年度は、日本社会福祉学会にて、ポスター発表及び日本介護福祉学会において、口頭発表を行った。その内容を含めた冊子をつくった。また、介護は複数であることを条件とし、ヒアリング調査を実施した。2020年度は、報告書として冊子を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
母子家庭の介護問題について、積極的な回答を求める項目は皆無である。母子家庭は特有な多問題を包摂しているがゆえに、先行研究は保育や子育て支援、経済問題が中心で、老親の介護問題について研究されている論文は見当たらない。全国調査をすることにより、地域性の差異を確認し、普遍的な施策と地域によって必要な施策を類別することができ、地域の特性に応じた包括システムを構築することが可能となる。

研究成果の概要（英文）：In the academic year of 2018, a questionnaire survey was conducted towards 627 single-mother families through National Federation of Single Parents and Children’s Welfare Associations in Japan. Out of those answered, 44.35% cared for the elderly, 11.79% had double responsibility and 1.02% triple responsibility. 54.5% of them were in their 50s. Changes in their life styles often cause them financial difficulties. In 2019, we made a poster presentation at the 67th JSSSW conference, presented at the 27th JARCW conference, and made a booklet. We also conducted an interview survey to single-mothers with multiple care, including childcare, eldercare, and care for the disabled, and more. In 2020, a booklet was made including the findings.

研究分野：ひとり親家庭

キーワード：母子家庭　複数ケア　子育て　ソーシャル・キャピタル

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

総まとめ：今後の研究の方向性と研究課題

１）複数ケアについて

複数ケアについての概念を、「はじめに」のところに記載している。相馬・山下（2020）は「東アジア福祉レジームとダブルケア」と題して、ダブルケアという用語が使われている。ダブルケアは狭義と広義の 2 つの意味があるとし、狭義では育児と介護の同時進行という意味である。その背景には、高齢化・晩婚化・晩産化が影響している。育児と介護を背負う時期が縮まったことが原因の一つである。そして、子育てと介護を独立にとらえるのではなく、両方を同時にとらえることが大事になってきたと述べている。

広義のダブルケアは、多重ケアであるとし、子どもや親のケアだけでなく、自分のケア、配偶者のケア、障害をもつ子どものケアなど多重ケアがあると述べている。

本研究では、母子家庭の生活の現状を考え、広義のケアにあたると思われる多様なケアを複数ケアというくくりで考えた。その中には、子育てと多様な介護を範疇にいれてこの複数ケアという用語を使用することにした。

複数ケアには、自分の同居の両親をはじめ、子どもが介護を必要としている母子家庭もあった。「父は寝たきりの状態で７年いて亡くなった。今、母は認知症、施設に入所、母の病院関係は、全部私がした。子どもは中学 2 年の時から不登校」、「家事支援が必要な父、母は脳内出血で言語障害、子どもはまだ 2 歳」、「元夫の母親の介護、自分の両親の介護」というような状況の母子家庭もあった。

ヒアリング調査では、多様な介護実態と子どもの子育て、また、子どもが不登校であったり、障害をもっている場合など、切実な実態が明らかになった。21 事例の中では、７人は別居しているが、14 人は同居して介護を行っている。実父母の介護が一番多いが、同居していない場合は、近隣に住んでたり、介護を支援してくれる人（兄弟姉妹、親戚など）が得られていることがヒアリング調査からわかった。同居から別居に住まいを変更することもあり、介護でストレスをかかえる実態は多くのヒアリング調査で聞きとりされている。バランスのとれたケアは、子育て、介護を問わず孤立ではないケアの状況を、本人が作り出していることがわかった。たとえば、困りごとを話す人がいるなどで、ストレスをためないケアが、継続的に介護をすることが可能になる条件であった。

しかし、全数調査の困りごとに関するところでは、かかえる困りごとは子育てと介護では違うという内容の分析がなされている。このことから困りごとの内容が 2 倍になるということで、母子家庭の母親は、収入を得ることが厳しい現実と子育てと介護というケアを一人でかかえなければならなくなる。この生活状況は、非常に厳しい毎日ことがわかる。

２）母子会に入会している人、情報提供をうけやすい、横の関係の構築

本調査では、母子会に入会している母子家庭が調査対象者となった。このことは、母子会という社会的資源により、母子家庭の母親に少なからず何らかの情報提供がなされる環境に母親がいるということである。地域の母子会は、全母子協から多種多様な情報を得ることが

できる。既存の制度施策をはじめ、制度の変更、新規の施策などの動向などを一早く入手可能なことは、母子家庭にとって重要なことである。
ここで評価できることは、横の関係すなわち母子会の会員同士の関係が築かれることである。これは社会関係資本、ソーシャル・キャピタルである（稲葉、2011）。ソーシャル・キャピタルの基本は、皆同じ方を向いて、人々や組織の間に生まれる協調的な行動を意味し、基本的な構成要素としては、「社会における信頼・規範・ネットワーク」を含んでおり、他者に対する信頼といった互酬性の規範、そして人やグループ間の絆でネットワークされているということである。
ソーシャル・キャピタルの重要な分類は、「結束型（bonding）」のソーシャル・キャピタルと「橋渡し型（bridging）」のソーシャル・キャピタルである（三浦、2015）。三浦氏は、「コミュニティや社会的グループの間の「橋」をつくりだすような「組織的能力」の重要性を強調している。そのような組織間における橋渡し型ソーシャル・キャピタルこそ、中間支援組織が生み出すソーシャル・キャピタルといえる」としている。
これを母子家庭の情報把握や絆という点でみると、特に母子会に入会、あるいは知人が母子会にいるということからみると、「母子会の人が住んでいる住宅で、自分が不在でも心配ないよと言ってくれます。仲良くしてくれる母子会のおばちゃんがついてきてくれて、町会長さんに挨拶もしています。自分の家の方も何不自由なく、不在でも大丈夫です。」と話していた。この調査対象者は、自宅から離れて介護のために、ほとんど実家で過ごしている。また、母子会がしている活動で「母子家庭の方でお仕事をされていてお迎えの時間に帰ってこられない方の代わりに私たちが、保育園等に子どもを迎えに行って、家に連れて帰ってお母さんが帰って来るまでその子の自宅で見守る制度にかかわっている」と、母子会による母子家庭の個別支援の話をされた事例もあった。
　母子会の活動が、会員によって行われている場合もあり、多様な資源を母子家庭の母親に提供している。また、入会することが情報の取得に繋がるということになる。会員が人的資源になり、相互に社会関係資本、ソーシャル・キャピタルの形成を確立している。ヒアリング調査から見える地域と母子会、人的資源の交流と絆によって地域で生活する母子家庭は、孤立化を回避し、多様な問題解決の糸口をつかむことができている実態が、ヒアリング調査からうかがえた。

３）母子家庭調査の視点

①母子家庭への視点

多くの調査は、母子家庭の子どもに視点をあてて、実態調査やヒアリング調査がおこなわれるのが通常である。また、母子家庭の母親に軸を置き、調査、研究を行っている場合もある。子どものことを考えると、母子家庭の母親と子どもの毎日の生活の充実が大切であり、施策や制度が、母子家庭にとって役立つものになっているのかが課題として考えられてきた。
個々の母子家庭がかかえる問題は、一般家庭と同様に多様である。その中で、母子家庭とな

って生活している場合、たとえば、離婚や夫の死亡でひとり親になる。ライフサイクルで母子家庭が生活していく経過をみると、離婚、子育て、介護という順序でかかえる問題が現れてくる。介護に視点をあてて、母子家庭の調査研究をしている先行研究等が、あまりないのではないかということで、母子家庭と介護についての調査をして、介護の実態を明らかにできないかということで、この調査を始めた。
母子家庭のライフステージの整理が、母子家庭の生活を理解するのに必要ということから介護、介護と子育て、複数ケアについて研究を進めることになった。

②介護と生活支援
日本の介護の状況は多様化していることをあげることができる。これは、家庭の多様化と同様に、母子家庭の実情も大きく変容していることを意識しなければならない。
　この複数ケアの視点が、本調査の特徴であり、まだ研究が進んでいない分野でもある。調査で見えてきたのは、母子家庭の介護の現状であり、個々の母子家庭がかかえる問題は、多様化し、多重化している状況であった。たとえば、「姉やお嫁さんがきておむつをかえたり、・・・一人で介護を背負ってるわけではないですので、特に大変と思ったことはないですね」と、協力者がいるので介護を前向きに考えていた。一番深刻な状況は、相談する人もない状況の調査対象者である。「仕事と介護の発散する場もなく、自分の時間が持てないっていうストレスになっています」と話し、親に子どもが小さい時、助けてもらったということに感謝し、親の介護をしている人もいた。このように、介護の考え方もその家庭の個別事情を反映した状況の中で行なわれていることがわかった。
　私たちは、生活をしていることをまず考えなければならない。この視点は特に母子家庭の場合は重要である。子育てや介護で、生活のバランスが崩れるために、自分の時間をもてない、リフレッシュする時間をつくることができない等の問題がある。これを解決するためには、生活支援をしてもらいたいが、どのような方法があるのか、活用できる制度施策はどうすれば見つかるのか、など社会資源を知るための関係機関や団体の存在を知ることである。個々の母子家庭のエンパワーメントを引き出すために、取り巻く人的資源がどのように生活支援の必要性を見極めて、支援体制を構築するかが大きなポイントとなる。必要な生活支援をいかに、個別対応にして各母子家庭にマッチするように考えるか、すなわち、問題解決の道筋をコーディネートする機関や人材がいるが、現状ではそのよう役を果たしているのは、民間の団体である。個別計画を立ててというような状況ではなく、個々にかかわりをもった人材、母子会の会員の人がピアな関係の中で、問題解決のための支援策の提供をしているのが現状である。今後は、母子家庭の生活を、丸抱えでみて家庭生活の充実に繋がる支援を提供できるようなシステムが必要である。また、将来の展望を見据え、母子家庭のライフステージを考えての支援ができるような人材の育成も課題となっている。

４）今後の方向性

今回の調査は、全母子協の支援で、全数調査、ヒアリング調査を実施することができた。ここでの課題は、母子会に入会していない地域の母子家庭の母親は、どのような方法で支援を得て、その支援を知ったのはどこからの情報なのかということが気になる点である。
今回、2020 年 12 月から 1 月にかけて、母子会に入会していない母子家庭の母親にヒアリング調査を実施することができた。5 事例ではあるが、かなり厳しい現状が明らかになった。このヒアリング調査の分析等は、これからであるが、この 5 事例は深刻な問題をかかえながらも地域の支援、母子生活支援施設のアウトリーチによって、必要な情報を得て生活できている事例であった。
ソーシャル・キャピタルの視点から母子家庭の生活実態を分析する必要がでてきた。母子家庭の母親が、何が問題かも理解できないケースや、介護・子育ての支援で何を使えば今の苦しい状況が緩和されるのかなど、結束型といわれるソーシャル・キャピタルが弱くなると、ここで解決できない問題は、母子家庭内に蓄積していく。その時に、橋渡し型ソーシャル・キャピタルが確立していると、この母子家庭は問題可決の糸口を発見して、なんとか生活支援を受けながら日常を過ごすことができる。橋渡し型ソーシャル・キャピタルの形成こそ、公的な支援の「ハザマ」を埋める民間支援として重要な役割を果たしている。
以上の検証を実施したく、母子家庭の生活支援に必要な社会的仕組みについて、今後も研究を継続することにしている。

参考・引用文献

稲葉陽二、2011、『ソーシャル・キャビラルに入門・孤立から絆へ』中央新車、pp. 1-39
相馬直子、山下順子、「特集「東アジア福祉レジームとダブルケア」」『大原社会問題研究所雑誌　No736/2020.2』、p. 1
三浦一浩、2015「地域自治、市民活動とソーシャル・キャピタル」『ソーシャル・キャピタル』坪郷實編、ミネルヴァ書房、pp. 139-142

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 流石智子、髙岡理恵、吉島紀江、木村あい	４．巻 第64号
２．論文標題 母子家庭の介護実態―住まい方による子育て・介護の疲れ、母子家庭へのアンケート調査からー」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 京都華頂大学・華頂短期大学研究紀要	６．最初と最後の頁 23.33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 流石智子、髙岡理恵、吉島紀江、木村あい
２．発表標題 母子家庭の介護実態
３．学会等名 日本介護福祉学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 流石智子、髙岡理恵、吉島紀江、木村あい
２．発表標題 母子家庭および寡婦家庭におけるダブルケアー子育てと介護の困りごとー
３．学会等名 日本社会福祉学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	髙岡　理恵 (TAKAOKA Rie) (30442263)	華頂短期大学・幼児教育学科・准教授 (44304)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉島　紀江 (YOSIJIMA Norie) (30461990)	池坊短期大学・幼児保育学科・准教授（移行） (44303)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	木村　あい (KIMURA Ai) (70412111)		
研究協力者	松尾　章子 (MATSUO Akiko) (70413325)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関